

四高「寒潮事件」に秘められた四高生と女学生との純愛 —なぜ“墮落学生”のレットルが貼られたのか—

Analysis of The “Kancho” Case of 1908 at the Fourth Highschool: Why Were
The Sweethearts Blamed?

金沢星稜大学人間科学部教授

井上好人

INOUE, Yoshito

はじめに

学都・金沢の明治期にも、旧制高校生などを主人公にした恋物語があった。

菊池幽芳が大阪毎日新聞に連載した小説「寒潮」(連載期間：1908(明治41)年1月1日～4月21日)である。

これは四高の一学生と「北陸女塾」^(注1)の女学生を中心に、男女3組の恋愛模様を描いた物語で、兼六園での逢引場面なども交え、学歴エリートたちの文化と彼らを取り巻く世相を描いた家庭小説である。彼らのハイカラで洒落た趣味の影に潜む甘い誘惑、というプロットが読者の好奇心を喚起する仕掛けになっていた。

ところが、同小説は、当時、校風改革運動最中の第四高等学校生徒(以下、四高生と略称)たちによって次第に問題化され、同年4月21日で連載中止に追い込まれた。「寒潮事件」である。

「寒潮」は、なぜ四高生によって問題とされたのだろうか。

学生を主人公とした悲恋の物語といえば、尾崎紅葉『金色夜叉』(1897(明治30)年～1902(同35)年)をはじめ、小杉天外『魔風恋風』(明治36年)や小栗風葉『青春』(1905(明治38)年)などが新聞小説界で一世を風靡していた。例えば、『魔風恋風』は、「帝国女子学院」^(注2)の生徒と帝大法科の学生との恋愛を描いている。女学生は、自転車に乗った海老茶袴に白リボンが眩しいハイカラ令嬢であるが、同時に甘い誘惑に囲まれ墮落の危機に瀕している。いわば聖と俗の両義性を帯びた存在として表象されるが、そんな女学生と恋に落ちるのがすでに許嫁もいる東大生である。

だが、実際の一高生や東大生がこの小説に対し抗議活動を起こして社会問題化したとは寡聞にして知らない。むしろこれらの学生小説は、男女交際の在り方や恋愛の精神性を読者に問いかけるテキストとして広く社会的な機能を果たしていたともいえるからである。

「寒潮」もこういったスタイルを踏襲した通俗的な小説のひとつとなるはずだった。作者・菊池幽芳は、「新聞小説の内容、形式を決定づけた文学者」(岡保生)として、「己が罪」(1899(明治



図 ヴァイオリンを奏する四高生・[中川乙哉]とこれを聴く「北陸女塾」の女学生・[久代]「寒潮」第30回『大阪毎日新聞』(明治41年1月30日)

32)年～1900(同33)年)や「乳姉妹」(1903(明治36)年)をはじめとした時代感覚に冴えた家庭小説で読者を魅了し、当時の人気作家であった。しかも「寒潮」は「当時金沢で実際に起こったある事件を小説化した完全なノン・フィクション小説」(『近代文学研究叢書61』)と言われ、物語は3組の男女の恋愛模様を相互に絡めながら展開する。幽芳自身も「筑紫」という新聞記者で登場しているように、同小説の執筆にあたり、金沢を訪れ、四高生や女学生を取り巻く様々な恋愛を取材し、小説中に盛り込んでいる。

そして、「小説の主人公中川乙哉は四高生で、其の頃文芸界や教育界の問題になっていた自然派の好典型墮落学生の一標本であったことから、その周囲にかかわってくる女学生のひとりが北陸女学校を退学させられるということがあり、その間に点綴される事件の数々はすべて事実符合したため、その反響は異常なまでに拡大された」(前書)というのである。

上記の『近代文学研究叢書』の叙述は、当時の人々の印象をうまく汲んでいるかもしれないが、誇張もあり誤解もある。たしかに「寒潮」は、新思想の“恋愛”を扱い読者の欲望を煽情的に刺激したかもしれないが、同時にこのような行為を墮落とみなし“恋愛”が成就されないプロットによって、家庭小説の秩序内に収まっていたからである。

おそらく「寒潮事件」は、小説のプロットに内在した問題として捉えるよりも、新聞メディアの果たした社会的機能を分析したり、四高側の論理から分析するほうが、より妥当な解釈が可能だと考えられる。前者は井上(2009a)ですでに試みたので、小論は後者に焦点をあててみたい。

すると、校風の樹立から学生生活のスタイルに至るまで一高を準拠集団とする傾向の強かった地方学生たちが——当初は彼らも喜んで連載を楽しみに読んでいたとの証言も残されているのに——なぜ、大騒ぎして問題化させる必要があったのだろうか、という問いが立てられる。ひょっとして、標的を外部の新聞社へ向けざるを得ない四高内部の葛藤があったのだろうか。また、事件が河合良成世代の校風改革運動の翌年であったことは、一連の運動との繋がりとして解釈できないだろうか。あるいは、学生を抗議へと駆り立てる教師の暗示的な支援があったのだろうか。

この点について、第四高等学校関係文献は、学生の本分に覚醒した学生とそのことに無頓着な学校当局あるいは世間(新聞社)という図式によって、いわば外部責任説で説明しようとしている。例えば、『四高八十年』では「寒潮事件にしろ、四高事件にしろ、学校当局が、急速に向上してきた学生の精神的めざめを十分に理解把握しえないでこれを抑制するという、処置のよろしきを得ない黒星が、いたずらに学内の紛擾と世の批判を巻き起こした向きもあったようだ」(同書、44頁)と述べられている。また、『第四高等学校時習寮史』でも同様に、「この様に校友が一致團結してよく四高の名を穢すことなく、新聞を反省せしめることのできたのは、南下隊以来の校内團結の風の然らしめた所であり、四高の健在を示すものであつた。校風問題とはもと、目醒めたるものと眠れる者との対立を豫想する」(同書、44頁)と、批判の矛先が外部に向けられている。

小論は、従来のこうした解釈に無条件に与することなく、いま一度、学生内部の葛藤説に立ってみたい。すなわち、ラベリング論の考え方——「誰が誰を何のために非難したのか？」——にもとづいて、同小説の連載を問題視し“事件化”させていった人々の思惑を浮き立たせ、当時の四高生を取り巻く葛藤の図式を析出してみようとする。そして、モデルの学生が“墮落”のレッテルを貼られ制裁を浴びなければならなかった理由を明らかにしてみたい。

具体的には、金沢大学資料館が保管している『学籍簿』と『学年評定簿』を利用し、四高において校風を問題視し“事件化”させていったグループと制裁された学生(小説のモデルにされ鉄拳制裁を浴びた一学生)のプロフィール分析を行うことによって、糾弾者／非糾弾者の特徴を浮き彫り

にする。

同資料について説明しておこう。『学籍簿』とは、正式名称が『明治36年9月 大学予科学籍簿 従明治36年入学者 教務掛』『明治40年9月 学籍簿 従明治40年入学者 教務課』『明治44年9月 学籍簿 従明治44年入学者 教務課』のものを指す。それぞれ、明治36年9月から明治39年9月までの入学生、明治40年9月から明治43年9月までの入学生、明治44年9月から大正3年9月までの入学生の帳簿で、項目として、「族籍」（士族／平民の別と本籍府県）、「生年月日」、「入学前履歴」（中学校卒業までの履歴）、「入学級」、「入学月日」、「学業」（進級の年月日と組）、「摘要」の欄がある。次に『大学予科学年評点簿』とは、正式名称が『大学予科学年評点簿 自明治三十九年九月至明治四十年七月 第四高等学校』などと記された帳簿のことである。明治37年9月～38年7月、明治38年9月～39年7月、明治39年9月～40年7月、明治40年9月～41年7月、明治41年9月～42年7月、明治42年9月～43年7月、などの表書きがあり、それぞれ単年度ごとに3学年分の個人別学業成績が記載されている。

1. 娯楽と報道の混交戦略として

「寒潮」は、菊池幽芳全集にも載っていない“幻”の小説ともいうべきもので、現在、わたしたちは石川県立図書館が所蔵している大阪毎日新聞（以下、「大毎」と略）の複写でようやく読むことができる。その大まかなプロットと人物相関図については、井上（2009a）で紹介しておいたので小論では省略することにする。是非、そちらを参照してもらいたい。

ここでは、3組の恋愛劇のうち中心となる四高生と女学生の恋愛について概略を再掲するに留めておく。（以下、[] 内は登場人物名を表す。）

[松村久代]（17歳）は、北陸女塾（北陸女学校を指す）に通う女学生である。父は亡くなり、母は病弱のため郷里へ転居し、現在は親戚の[三國春子]（25歳）に引き取られている。丸顔立の目元に何ともいえない愛嬌があり、女学生らしいあどけない雰囲気がある。よく勉強し、卒業後はさらに高等教育を受けようと思っている。けれども、男子学生からよく眼をつけられ、手紙をもらったり、それに返事を出したりもしている。[春子]は彼女の「墮落」を心配している。一方、[春子]は、「美人後家」の評判高く素人下宿を営み、四高生を3人下宿させている。「下宿を求むるものが門前市をなす」ほど盛況である一方で、「いづれ何かの野心あつての事」、「例の若後家の下宿商売」などと冷ややかに揶揄されている。

[中川乙哉]は、四高二部（工科）2年である。出身地は明記されていない。北辰會の音楽部員で、趣味はバイオリン。「服装も見苦しからず、一寸人品も悪くないやう」、「滑らかな油のやうな声、人を魅するその眼」が武器。下宿の部屋に西洋人形を置いており、これは彼の趣味であると共に、女学生の人気を高めるためのアイテムでもある。「いやに気取つた男で、女学生と懇意になる事が非常に巧い奴」として他学生からの評判はあまり良くない。

そして、純真な女学生[久代]は[乙哉]と知り合い交際を迫られる。軟派学生の手練手管に翻弄される久代の運命はどうなるのか、また、久代に迫る「山里倶楽部」とは何者なのか、という謎を中心にストーリーが展開する。

このような、異性関係に翻弄され「墮落」への誘惑に囲まれる女学生を物語の中心に据えるのは、当時の「女学生墮落論」の流行に乗ったものであった。彼女たちは、自らの新しい生き方を主張したりしない。ハイカラな教養を身につけた女学生は、儒教的で因襲的な規範からすれば逸脱してい

る存在であった。些細な言動がそれ自体好奇心まなごしで見られ、非難の対象となった。新聞や教育雑誌に学生の墮落を憂慮する論調の記事が頻りに掲載されるのは、明治三十年代半ばから四十年代はじめにかけてである。稲垣恭子は「女学生墮落論」の流行の背景として、華やかで魅力的な女学生の志を評価する制度化された場がなかったことを挙げている。『魔風恋風』（1903年）や『蒲団』（1907年）がベストセラーとなった理由は、ヒロインが新しい時代の理想に生きようとして挫折していく物語であったことで、読者が“好奇心”と同時に“安心”を獲得できたからである（稲垣、2007）。

さて、[乙哉]のモデルは四高生X生、[久代]のモデルは北陸女学校のYさんと噂されている。X生は、北陸のA県出身で明治39年四高入学、作者が明治41年初めの小説連載に際して、前年の秋に取材しているならば、[乙哉]の2年生という設定と一致する。Yさんは北陸女学校を明治39年に卒業し小説連載当時は同校補修科に在籍していた。（なお、先の「女学生のひとりが北陸女学校を退学させられる」という文面は、彼女のことでなく、別の登場人物のモデルを指している。）

だとすれば、「寒潮」は、小説という体裁をとりながら、巷の噂や事実が取材されリアルタイムで報道されているかのような錯覚を読者に与える効果をもったことだろう。こうした娯楽とも報道ともつかない小説の在り方（娯楽と報道の混交）は、当時の新聞社のひとつの戦略的な方向性であった。彼らは、「寒潮」が「事実」に符合しているという反響を想定して連載を開始したのである。大毎紙の石川県でのシェア拡大を企図していたためとも謂われる。だからこそ、登場人物のイメージが過剰にモデルに投影され、彼らを取り巻く噂が増幅され、事態がより深刻に受け止められたのだろう。しかし、新聞メディアからすれば、この企画は次のような意味で成功を収めたのである。

第一に、「寒潮」は、モデルを実際の出来事から取り組むことで、読者にリアリティをもたせることに成功しただけでなく、逆に、周辺に絡んでくる地元社会の諸々の出来事を“事件”として紙面へ還元させるパイプをつくれたからである。第二に、新聞社の「寒潮」連載は、四高生による事件化によって連載中止に追い込まれたが、金沢市中の話題を一身に集めたという意味において、当初の目論見以上であったといえるからである。すなわち、このような娯楽と報道の混交戦略によって、新聞メディアは明治三十年代以降、急速に国民的な言説空間としての立場を固めることができたのである。

現在のわれわれは、当時の娯楽と報道の混交戦略とは無縁な立場にいる。登場人物のイメージに惑わされることなく、モデルと目された学生や女学生の真実の姿に思いを馳せ、「寒潮事件」の意味を問うていきたい。その前に、「寒潮」が“事件化”されていった経過を次節でおさらいしておこう。

2. 小説「寒潮」が四高生によって“事件化”された経過

「寒潮」が問題視されるきっかけと学生たちの運動経過について、四高関係文献や当時の新聞は、どのように伝えてきたのか。事件の検証の前に、以下にまとめておこう。

2-1 連載小説の当初の反響

金沢での大毎紙は販売部数わずかに五～六百部程度ということもあり、四高生のそれほど注目するものではなかった。明治41年2月の演説会で、学生の一人が「我校風と某新聞」という題で演説を行い、同小説が四高の名誉を汚すものだと指摘した。

2-2 「南下軍」の敗戦と野次

明治41年4月に実施された「南下軍」^(注3)が、京都で三高・六高との対抗戦を行った際に、野球の対戦相手から「寒潮の主人公!」「中川乙哉」「帰れ帰れ南下軍、ララ寒潮、ワァ〜」といった野次が浴びせられた。京都・新京極では「寒潮」劇上演のチラシが貼られており、劇中の「四本の白線の入った帽子をかぶった四高生が海老茶袴をはいた女学生と手を組んで兼六公園を散歩する様な場面」(津山玄道の回顧『四高八十年』)を、野球試合で揶揄されたというわけである。さらに、試合でも敗れたことが四高生のショックを増大させた。百万遍の宿舎に戻った選手たちは皆蒲団に顔をうずめて男泣きに泣いた。

「直に大阪に赴きて毎日新聞社に押し掛け手痛き談判に及ばんと主張する者」(北陸新聞記事)もいたが、とにかく帰校の上方針を定めることになった。選手達は、夜中、ラケットやバットをへし折って三高のグラウンドに埋め、四本の白線の入った帽子を懐に隠しながら金沢へ帰還した。すると、金沢では尾山座で「寒潮」劇が上演されようとしており、既に役者も人力車で町廻りを済ませていた。

2-3 臨時生徒大会開催

4月18日、創立記念日式典の後、壇上に登った一生徒あり、「諸君、一寸待つて呉れ給へ、本校の校風と名誉に関する重大事件について御相談したい。それは『寒潮』を今なお連載してゐる大阪新聞膺懲(注)膺懲:「征伐する」と尾山座の演劇封鎖の実行である」。生徒監を務めていた教員・三竹欣五郎も登壇し悲憤慷慨の辞を吐き、ここに臨時生徒大会が開会。楠木福松、尾佐竹堅、小林鉄太郎の3名が委員に選ばれた(『時習寮史』)。その結果、次の決議が行われた。(一)大毎紙を金沢市内から全部ボイコットすること、(二)大毎通信部長に責任をとらせること、(三)小説「寒潮」の連載を中止させること、(四)尾山座の寒潮劇上演を中止させること。

2-4 大毎と尾山座への抗議

翌日から、下級生は早朝から大毎の配達先を全部調査して本部に報告し、午後から上級生がその配達先へ説得を試みた。「私は一年生であったので、朝早く、下宿を出て新聞配達の後をつけて、大毎の配達先を書き止めて本部に報告した。そこでこの時来れと喜んだのは大朝である。翌日から学校へ行くと、全校生徒の机の上に大朝紙が配られて無料サービスである。大朝本社からは激励の電報がくる。特派員がわざわざ大阪からやって来て激励の演説をやる有様であった」(津山玄道の回顧)。結局、金沢市助役・堀俊明の調停により、大毎側は、小説連載の中止とその資料提供役を務めた通信部長の左遷、という謝罪を提示し、学生側との手打が行われた。

尾山座との交渉については、当初、警察署へ陳情に行ったが、演劇の上演は警察力で中止を命じる権限はない、との返答で首尾良くいかず、次に尾山座へ押し寄せ、支配人との談判に及んだ。既に道具の配置も済んでいるので、としぶる座主に、今後尾山座には四高の生徒は一人も入らず金沢全市の各学校に呼びかけて入らないようにするとの強硬姿勢を見せたために座主も不承不承興業断念を受け入れた。

この間の4～5日、連日、静勝館での生徒大会が続いた。放課後に上級生が校門に立ちひとりの学生の外出も許さなかった。

2-5 肅正

小説のモデルと目されたX生をはじめ、一連のハイカラ学生と墮落学生の摘発と制裁が行われた。

以上、2-1から2-5までの経過をたどり、事件は収束した。事件後の学生の変化を、『北辰會雑誌』は次のように伝えている。

寒潮事件以来内部の校風発揚に力を尽した我部は今や一通の光明に向つて外界に飛躍すべき時を得た。今迄は実際我校には軟弱な分子が非常に多かつた。一寸一例をあげれば二、三年前迄は頭髪を分けたハイカラが学生中に多数あつたが今は一人も居ない。形式に於ても余程以前とは変つたのみならず、四高の学生の精神が活気を帯びて来たのは驚くの外はない。

(「演説部々報」『北辰會雑誌』第56号、明治42年12月。下線は引用者による。)

明治42年に撮影された授業風景の写真をみても、学生たちは皆坊主頭である。だが、私たちはそれ以前も四高生の風貌がすべてこのような写真の姿であつたと思ひ込むのは早計のようだ。「寒潮」の挿絵に描かれた「乙哉」が長髪であつたように。

3. 四高内部に何をめぐると対立があつたのか？

寒潮事件を考えると、次の視点が重要になるだろう。第一は、事件を、校風改革運動の烽火をあげた河合良成らの世代（以下、「河合世代」）から尾佐竹堅らの次の世代（以下、「寒潮世代」）にかけての一連の運動の一つとして捉えることである。第二に、小説中に表象された四高生イメージへの反発や嫌悪の裏に、多様な学生生活のスタイルを容認できない彼らの苛立ちのようなものが隠されていることに注目することである。彼らは、何のために誰と闘っていたのだろうか。

当時、「学生」としてのアイデンティティと学生生活の在り方を巡って、彼らの志や野望に閉塞感とジレンマが漂っていた。明治三十年代半ばにかけて、学歴が様々な特権の資格取得の要件として重要であることが広く認知されるようになった。進学熱に浮かされた若者たちに対し、当局は高等教育機関の整備拡充をすすめる。「学歴主義の制度化」である。1903（明治36）年から1918（大正7）年の十五年間で高等教育機関の在籍者数が2倍に増える（国立教育研究所編（1974）、1198-1199頁）が、こうした拡充政策は、旧制高校に在学していることの希少価値が薄れ、学生の地位が相対的に低下するというジレンマを引き起こそうとしていた。キンモンス（1995）によれば、東京帝大を卒業して奏任官になった者の割合は、1893（明治26）年から1897（同30）年にはほぼ全員であつたのが、1903（明治36）年から1912（同45）年には二人のうち一人に半減している。

この時期に、なぜ旧制高校で校風改革運動の嵐が吹き荒れたのか、また、なぜ「煩悶青年」が出現したのかという問いも、キンモンスの指摘する高等教育の希少価値の逡減に伴う立身の機会の閉塞という状況から説明できるだろうし、また、竹内（1999）のような教養主義への過渡期として学生間の文化覇権をめぐる闘争としても理解することができよう。

では、こうしたジレンマが、四高生の場合、彼らの中にどのような対立や葛藤を生じさせていたのか、そして、「寒潮」の事件化とどう関わっているのかについて、次にいくつかの仮説を提示し検討してみよう。

3-1. 出身地域に根ざす対立説

第1の仮説は、小説中に表象された[乙哉]の都会的な趣味やセンスに対して、非都会出身者の側からの妬みや反発が生じたのではないかと、いうものである。

例えば、1906(明治39)年の新入生歓迎会の席上、森岡二郎が金沢の地と人を「金沢市は淫靡の地なり、金沢人は小人なり」と罵倒、これに加能同志会が反発し彼に抗議した事件があった。この抗議行為を河合良成は「団体の力を以て一箇の森岡氏を威壓(圧)したり」と非難、森岡を擁護したことを思い返してみよう。森岡は奈良県出身、河合も盟友の正力松太郎と共に富山県出身で『北辰会雑誌』で金沢の風土や人士への批判を展開していた。河合世代の校風改革運動は、石川県出身者(「加能同志会」)に対して、周辺県出身者が、校内を牛耳るための闘争を仕掛けた感があった。

郷土や郷友への想いがときとして他県の風土への嫌悪として表出し、騒動の原因になることは、当時の高等教育機関ではよくみられた。こうした出身地域間の対立が顕わになる理由のひとつは、入試に総合選抜制が導入され、学生の出身地域が広域化したためである。学生の構成は、第一志望で入学した者(主に北陸・信州出身者)と第二志望以下で四高に回されてきた者の2つの層に分かれた。1907(明治40)年入学者の場合、第一志望での入学者は全体の4割弱にすぎない。「この両派の学生は、一見してすぐ区別がついた」と河合は言う。

北陸人はきわめて素朴で、洋服こそ新しいが、物の言い方から一々の動作に至るまで、すべてバンカラである。ところが、東京から流れて来た連中は、洋服も生地から仕立方まできちんとスマートで、頭髪なども伸ばしたものが多く、言葉も垢ぬけしていて、談話の内容まで違う。中には四高の制帽の「四本の白線」を、一高流に「二本」しかつけていないのもあった。あとで、こんなことから校風問題が起るのである。やはりそういうことに対する国粋保存的の念というものが、田舎の学生の方が強いのである。(河合良成『明治の一青年像』,87頁。)

一高に憧れ、受験をしたが果たせず、四高に振り分けられたことから生じるルサンチマンを抱く学生。一方で、そんな彼らの都会風のセンスを冷ややかにみて反発をおぼえる学生、という構図を河合はよく観察していたのである。前者のハイカラ志向は都会出身者+上京を夢見た地方出身者から成り、後者のバンカラ志向は四高第一志望の北陸地域出身者から成る、と模式化できよう。そして、同じ北陸地域出身でも、石川県とそれ以外では微妙な温度差が漂っているなど、学生間の一致団結が生まれにくい状況にあったのである。

3-2. 趣味やハビトゥスの相違による対立説

上記の都会風/田舎風の対立図式は、言い換えるならば、ファッション・センスや人間関係の保ち方、あるいは文芸や音楽などの趣味への関与の仕方についての距離感の相違でもあった。物語では、[乙哉]が音楽部員で、ヴァイオリンの演奏が女性の気を惹く術として皮肉られ、音楽会やキリスト教会が、男女の出会いを提供し交際を取り結ぶ場として描かれている。とすれば、事件は、単に男女交際に興じる“ナンパ”的な態度への嫌悪のみならず、もっと広く、西洋音楽や文学、キリスト教といったハイカラ風の趣味やハビトゥスへの違和感をも含んでいるのではないだろうか(第2の仮説)。ハビトゥスとは、趣味、感性、知識、教養、言語をはじめとする人間の行動の様式が学習を通じて身体化された性向の体系を指す。ラテン語のhabitusが語源で、社会学者・P.ブルデューによって概念化された。

西洋音楽は、わが国においてはヨーロッパ思想を表象しながら、キリスト教会やミッション・スクールと関係をもちながら広まっていった。この趣味は、日本人にとって羨望の対象であると同時に、忌避感や嫉妬心をも抱かせる両義的な性格をもっていた。寒潮事件の最中、静勝館の生徒大会で「音楽部廃せざる可らずと絶叫せる一熱血児」がいたというのが、[乙哉]を念頭に置いてのみの言動とは言い切れないだろう。なぜなら、旧制高校の音楽部は、他校でもその成立当初から他学生からの懐疑の中で活動を開始し、常に批判と廃止の論の矢面に立たされていたからである。

例えば、第一高等学校音楽部は、1892（明治25）年に設立された草創期の音楽部であるが、一部学生から「一高の学生のくせに、音楽などやるのは柔弱だ、けしからん」などと非難され、また音楽活動の校友会への貢献度に疑念を抱かれ、1896（明治29）年2月に廃部に追い込まれている^(注4)。

四高音楽部も例外ではなかった。1906（明治39）年に、石倉小三郎（シューマンの＜流浪の民＞の名訳者として有名）が四高に赴任したのをきっかけに創設された音楽部は、「南下軍の歌」を作曲した築瀬成一をはじめ小林鉄太郎などが部員に名を連ねていた。第一回の演奏会は、1907（明治40）年春に行われ、多くの人々を魅了し大盛況のうちに幕を閉じている。ところが、この日の招待客に婦女子が混じていたことが、その後、物議を醸すことになったのである。

「音楽部の将来に就て」というタイトルの投稿が『北辰会雑誌』第53号に「B生」のペンネームで掲載されたのは、1908（明治41）年12月のことである。同論文によれば、最近、音楽部を廃せよとの声の一部の人士によって唱えられているという。第一回演奏会で、「我神聖なる至誠堂に婦人の影の認められしを以て甚だ不快事とし、密に唇を噛みし潔癖児」もいたように、過激な音楽部廃止論者は、音楽そのものの芸術的価値を認めず、音楽部を「腐敗漢の団塊」とさえ見なしている、というのだ。穏健な意見でも、音楽部は当面、四高にその必要がない、なぜなら「北辰校は目今の処、一意専心校風の樹立に盡すべきの時機にあれば、従来の如き、醇良なる校風を樹立する上に、假令害ありとも益なき音楽部の如きは、其存立を要せず」というのである。

彼らの忌避感は何に由来するものだろうか。管見では、洋楽に興じるという行為そのものが、多くの学生にとって相容れないハビトゥスとして反発心を生じさせていたのではないかと判断したい。あるいは、キリスト教ヘンパシーを抱いている洋楽愛好者たちへの違和感や警戒感というのが、一同の冷やかなまなざしの背景にあったのかもしれない^(注5)。

音楽部は、バンカラ学生たちはもとより、校風改革論者をも相手に、自らの存立意義を訴えなければならなかった。「寒潮」批判は、西洋音楽やハイカラ文化への四高生の羨望と嫉妬を含んだ忌避感の表明でもあったわけである。

明治三十年代以降に起こったハイカラ趣味を巡るこのアンビバレントな感情の高まりの背景について、佐藤八寿子は、「表象としての“欧化”よりむしろ、国民という近代化の原理が強く稼働した」（佐藤、2006）ことを指摘している。当事者の河合良成が「そういうことに対する国粋保存的の念というものが、田舎の学生の方が強いのである」（河合、前掲書）と吐露した感情と重なる。[乙哉]の西洋人形やヴァイオリンの趣味が、スキャンダルに容易に結びつくネタとなったのは、告発者側に有利な時代潮流があったことも見過ごすわけにはいかないだろう。

3-3. エリート学生の差異化戦略として

次に、誰が学内闘争の主導権を握ったのかという視点から、校風改革運動にリーダーとして活躍した学生のプロフィール分析を試みてみよう。弁論や校友会誌上で論争を仕掛け、あるいはこれに

応じ、南下軍や寒潮事件でリーダーシップを発揮して外部の交渉に当たったのはどのようなタイプの学生だったのか。表1に主要リーダーの名前と出身地を示してみよう。

すると、彼らの出身地については、たしかに石川県を中心とする北陸地方出身者が多いが、必ずしも偏りがあるとはいえ、むしろ共通点として彼らの学業成績が総じてきわめて優秀であるという点に気づく（『大学予科学年評点簿』を参照）。つまり、河合世代にみられた出身地間抗争（「加能同志会」との対立云々）はあくまで論争上の対立点であって、論陣を張り合った者たちは互いに一目置くエリート同士であったわけだ。

表1 校風改革運動のリーダー

河合世代 1904（明治37）年入学	<河合派>河合良成（富山県、高岡中）、正力松太郎（富山県、高岡中）、品川主計（福井県、福井中）、森岡二郎（奈良県、郡山中） <反河合派>中山隆吉（石川県、二中）、藤井悌（石川県、二中）
寒潮世代 1905（明治38）年入学	尾佐竹堅（石川県、三中）、小林鉄太郎（山形県、荘内中） 楠木福松（三重県、三重四中）

同じ例を一高弁論部にみることができる。井上義和（1998）によれば、一高で、学校文化の正統性を獲得しエスタブリッシュされた集団としての地位を固めたのは、弁論部であった。文学、教養、哲学、人生問題について華々しく議論を闘わせる部員たちは、アイドル並みのスターに登りつめたという。前田多門（文部大臣）、河合栄治郎（東京帝大教授・経済学）、鶴見祐輔（内務官僚、衆議院議員）など、部員に名を連ねていたのは学業に秀でたエリートであった。彼らが、一高の文化覇権をめぐる闘争に勝利し、教養主義を差異化のツールに仕立て上げることができたのは、「弁論」に内在する効果もさることながら、知的能力をバックボーンとした卓越性によってであった。

ここから、次の第3の仮説が提示されるだろう。明治後期に流行した校風改革運動とは、学校生活を自己の人生問題と重ねて思索しようとしていた学生が、すすんで「自治」の主導権を握り、その成果を競った政治的行動であった。すなわち、演説会での弁論合戦や校友会雑誌での論争、また対抗試合のマネジメントに寮風運動といった諸活動で周囲からの評価を獲得することは、野心あふれるエリートの卵たちの他学生に対する差異化戦略として機能した。彼らは、己の力量と卓越さを確認する場をこれに求めて行動したのである、と。

ではなぜ、一高でも四高でも、知的エリートがリーダーシップを執る現象が生じたのだろうか。キンモンス（1995）の指摘した学生気質の変化を立身出世機会の低下という社会経済的な要因として捉える方法を援用してみよう。例えば、坪内逍遙『当世書生気質』の「書生」は、逸脱行為を許容して余りある立身出世の才途がいくらでもあったが、明治後期になるとそのような余裕はなくなり、組織の規範に従えない人間には立身の機会が与えられなくなった、と。すると、学生たちの学校生活への関心事も、集団内の競争でいかなるポジションを占めるのか、ということに注がれるようになっただろう。一方、旧制高校を卒業すればほぼ無条件に帝大へ進学できたこの時代では、競争の勝利感を己の進路によって誇示することには無理があった。だとすれば、エリート意識を持つ学生ほど、自らの卓越さを学内の政治的勝利によって確認したいとする心情が湧いてくるのは当然だったかもしれない。河合良成を「夜叉のごとく狂わしめ」た（河合、前掲書）あの情念である。

このように考えると、なぜ「寒潮」が事件化されなければならなかったのかが見えてくる。つまり、「寒潮」がターゲットとなったのは、河合世代が卒業した後の運動方針を決めかねていた次世

代のリーダーたちによる“次の一手”として選ばれたからである。“次の一手”とはどういう意味か。最初の目論見であった第二回南下軍が惨敗したからである。

河合らの企画した第一回南下軍も敗戦であったけれども、柔道での正力松太郎の奇跡的な活躍が敗戦を帳消にするほどの興奮を生みなんとか面目を保つことができた。では、第二回目の南下軍で勝利の女神が微笑む期待があったのかといえ、実は望み薄であった。西田幾多郎は、次のように記している。

けふは学生が又南下を企つるとかいふので例のグルマ、同一の事をくりかへす長會議。閉口致し候。南下などヨせばよいのに恥さらしに候。多分止になるならんと存じ候。

(明治41年2月15日付、田部隆次宛の書簡)

「南下などヨせばよいのに恥さらしに候」との辛辣なコメントは、彼が運動部(野球、庭球、剣道、柔道)の力量を冷静に測っていたからである。だが、「多分止になるならんと存じ候」という西田の予想は外れ、リーダーたちは南下軍を執行し、そして惨敗するのである。大毎紙への抗議へと駆り立てたのは、「帰れ帰れ南下軍、ララ寒潮、ワァ〜」という野次による屈辱感もさることながら、試合の敗戦によって新たなイベント企画が早急に必要とされたからであった。

もし南下軍が勝利していれば、「寒潮」は事件化されなかったかもしれない。リーダーたちのマネジメントは称賛され、勝利の興奮が四高生の団結に充分貢献したはずであったからである。

明治後期の旧制高校は、旧武士や農民といった属性の意味が急速に失われていく代わりに、学業を柱にした「学校化」の論理が重く作動する社会になっていた。わが国の近代化過程において「学歴主義の制度化」が存外早く浸透していくのは、校内で繰り広げられるこのような学生たちの競争と政治的運動が激しかったことが貢献しているのかもしれない。

4. 教師の新しい生徒管理術としての“事件化”

「寒潮」を事件化させていった人々は誰だったのか——この問いに、小論は、学生集団の葛藤の構図を析出して論じてきた。では、学生を指導する教師たちの思惑や指導の実際はどうであったのだろうか。

井上(2012)において、超然主義の「神話」が、教師による示唆によって誕生したのではなかったか、という説を提示した。火災後の時習寮にやむなく残らざるを得なかった学生たちの日常生活を“立て籠もり”という意味ある行為として気づかせ賞賛する教師、これは、学生を背後から見守り操る新しい教師像の登場であった。当時、学生の「自治」による生徒管理の方法へと移行しつつあった学校は、理論においても実践においても模範を示せるリーダーを選び、彼らを中心に学校改革を推し進めようとしていた。旧制高校での「修養主義」(努力により人格を陶冶する)の流行には、教師の思惑と支援が作用していたのである。

「三々塾」を巡る河合良成と西田幾多郎の関係もこの視点からみると理解しやすい。河合は、低迷していた同塾への入塾に際し、「現在おる塾生全部出てもらいたい。そして私が新たに塾をつくり直す」と西田に申し出、これに西田は「ウンよし、君のいう通りにする。みんなに出てもらおう」(河合、前掲書)と応えたという。一方、西田側の資料によれば、同じ頃、西田自身も塾員に不満をもち塾風が振るわないことを遺憾に感じていた。「此塾の主任を学校に信任厚き河合 茨木 林

等の諸君の中に願ふて」(明治38年5月18日、堀維孝宛への書簡)再興しようとして考えていたところであった。西田の不満と河合の要望とは最初から一致していたのだ。両者の思惑の一致によって、在塾生はすべて追い出され、新たな塾生として正力松太郎、品川主計、そして「寒潮事件」のリーダーとなる尾佐竹堅などの俊英たちが集められた。「後には三々塾が「鉄拳制裁」や「南下軍」の本拠のようなところ」(河合)になる出発点であった。

では、「寒潮事件」に教師はどのように関与したのだろうか。4月18日の臨時生徒大会が開会されるきっかけとなったドイツ語教師・三竹欣五郎の役割をみてみよう。当時、生徒監を務めていた彼が、「……登壇し悲憤慷慨の辞を吐いた、という一節である(2-3で記述)。一人の人間として激情に駆られ悲憤の辞をつい吐露してしまった、と受け取れる場面であるが、実際はどうであったのか。同日の時習寮『寮務日誌』には、次のように記されている。

至誠堂ニ於テ記念式挙行セラレ、……三竹生徒監ヨリ全生徒一般ニ対シ目下ノ寒潮問題ニ付懇ニ訓示ノ件アリタリ
(明治41年4月18日、『寮務日誌』)

ここには、「悲憤慷慨」ではなく「懇ニ訓示」とある。どうも、臨時生徒大会は、三竹ら教師と尾佐竹や小林ら学生リーダーたちによる計算づくの計画であったようだ。もし、教師たちによって同大会のお膳立てがなされなかったら、そして三竹の「訓示」がなければ、あれほど四高生全体を巻き込み、「事件」解決へ向かって一致団結へ誘うことができたかどうかわからなかっただろう。

もともと、神経質で心配性であった三竹は「いやゝながら生徒監をやり居り」、毎年「やめたいやめたい」と申出ていたが、当局からは許されず困っていたという。1905(明治38)年頃は、神経衰弱で医師から静養を勧められてもいた。だが、1906(明治39)年の時習寮の火災の一件で多忙になったことが、かえて彼に壮健をもたらした。寒潮事件では、「三竹君など随分骨を折られたる様に候」(明治41年5月22日付、田部隆次宛の書簡)とその行動力が評価され、1909(明治42)年頃には、立派な「策士然」とした雰囲気醸し出すようになっていたという(以上、引用箇所は西田日記)。三竹が演じたのは、彼が、学生との人格的接触を前面に出す旧来の教師像から退き、“黒子”としての機能を果たすオルタナティブ(alternative)な教師像であった^(注6)。彼にはこれがはまり役となった。

事件が四高側に有利な条件で収束し、学生の団結が一層強まるに至るのは、三竹のような“黒子”の教師たちによる“影からの支援”の賜物であった。「寒潮事件」は、学生の「自治」による「修養」体制にむけていっそうの駆動力を強化させるため、学生リーダーたちと教師の利害が一致した形で共同的に仕組まれた事件であったのである。

おわりに ～その後の[乙哉]と[久代]～

最後に、モデル学生への制裁がどの程度正当なものであったのか、考察しておこう。

[乙哉]は、音楽部員、こざっぱりした風貌と洗練された趣味をもっていたので都会人を連想させたが、そのモデルとして“墮落学生”のレッテルを貼られ糾弾されたX生は、北陸地方出身(出身県は判明しているが、ここでは伏せておく)であり、また、音楽部に所属したという記録はない。成績は悪くなく堅実で中位をキープしていた。とりわけ運動能力に優れ、[乙哉]のひ弱な“ナンパ”イメージと随分異なっている。

仮説2と3で検討したように、もし、「寒潮」への嫌悪と批判が「乙哉」イメージに向けられたものだったならば、“墮落”という汚名はX生にとってたいへん心外なレッテルであり、お気の毒な言い掛かりとしか言いようがない。事件と鉄拳制裁の余波はX生に相当の精神的なダメージを与え、校内での立場も危うくなったことだろう。事件後の1908（明治41）年～1909（同42）年にかけて成績が下がり、3年終了時に落第の憂き目に遭っている。その試練から一年間の留年を経て立ち直り、1910（明治43）年、立派な成績で卒業している。

校風改革運動は、こうした負の爪痕をも残しながら、輝かしい業績と栄光を後世に伝えていったことをわれわれは忘れてはならない。

二人の“その後”の人生を追っておこう。X生は、四高卒業後、東大（工）へ進学し、卒業後、地方官となった。いくつかの府県の幹部としての職務をこなしながら、土木関係の雑誌に論文を寄稿するなど、研究熱心な技官であった。戦後、定年後は会社重役を務めた。堅実で誠実な生涯というべきだろう。Yさんは、北陸女学校で2年間の補習科を修了し、さらに勉学のため関西の学校へ移った。向上心のある勤勉家であった。医師と結婚。夫が勤務医であったためか、戦前期は各地を転々としながらも子宝に恵まれた幸せな家庭を築いておられた。戦後も、母校愛に篤く同窓会活動に熱心で、1955（昭和30）年の北陸学院創立七十周年記念同窓会大会には遙々遠方から駆けつけ、寄金もしておられる。

二人の純愛の記憶を偲びつつ、小論が百年ぶりの名誉回復に資すれば幸いである。

【注】

- 注1 小説中の「北陸女塾」とは私立北陸女学校をさす。1884（明治17）年、米国人メリー・K. ヘッセルにより私塾として開学、1885（同18）年、金沢女学校、1900（同33年）北陸女学校と改称された。現在、学校法人北陸学院。
- 注2 「帝国女子学院」のモデルは日本女子大学校といわれる。
- 注3 「南下軍」とは三高との対抗戦のために京都へ赴いた選手団組織をいう。
第1回は1907（明治40）年3月で、野球・庭球・剣道・柔道の各運動部と応援団の計二百名が参加した。問題となったのは翌1908（同41）年の第二回南下軍での出来事である。
- 注4 1892（明治25）年に設立された一高音楽部が1896（同29）年に廃部に至る経緯については、井上好人（2009b）で論じた。
- 注5 音楽部へのキリスト教関係者の関与と支援については、井上（2011）で指摘した。例えば四高音楽部の場合、日本メソジスト教会と関係の深いA. マッケンジー（MacKenzie）や四高の英語講師・ガントレット（Gauntlett）などが共演していた。A. マッケンジーは、1888（明治21）年に来日し金沢白銀教会の創設に携わり四高で英語講師も務めたD. R. マッケンジーの子息であり、ガントレットは、1890（明治23）年、東京・本郷中央会堂の聖歌隊長兼オルガニストとして来日したイギリス人で、山田耕筈の義兄（耕筈の姉、恒と結婚）としても知られている。
- 注6 古い師弟関係によって結ばれる教師－生徒関係から新しい関係への変化、過渡期に遭遇した西田幾多郎の葛藤については井上（2012）で論じた。

【参考文献】

深谷昌志、1981、『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房。

四高「寒潮事件」に秘められた四高生と女学生との純愛 ―なぜ“墮落学生”のレッテルが貼られたのか―

稲垣恭子、2007、『女学校と女学生』中公新書。

井上義和、1998、「旧制高校文化における弁論部の地位と役割」京都大学大学院教育学研究科修士論文。

井上好人、2009a、「菊池幽芳・新聞連載小説「寒潮」に表象された四高生と女学生の恋愛」『人間科学研究』第3巻第4号、金沢星稜大学人間科学会。

井上好人、2009b、「旧制高校における音楽部の創設」、日本教育社会学会第61回大会発表レジュメ。

井上好人、2011、「四高における音楽部の創設―石倉小三郎に集う洋楽愛好者たち―」『人間科学研究』第4巻第2号、金沢星稜大学人間科学会。

井上好人、2012、「四高・「超然主義」の神話誕生～河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」～」『金沢大学資料館紀要』第7号、金沢大学資料館。

河合良成、1969、『明治の一青年像』講談社。

キンモンス、E.H.、1995、『立身出世の社会史』広田照幸他訳、玉川大学出版部。

国立教育研究所編、1974、『日本近代教育百年史 第四巻 学校教育2』国立教育研究所。

中村隆文、2006、『男女交際進化論・「情交」か「肉交」か』集英社新書。

西田幾多郎、1966、『西田幾多郎全集』第18巻、岩波書店。

佐藤八寿子、2006、『ミッション・スクール』中公新書。

昭和女子大学近代文学研究室、1988、『近代文学研究叢書 第61巻』昭和女子大学近代文化研究所。

四高開学八十年記念出版委員会編、1967、『四高八十年』第四高等学校同窓会。

第四高等学校時習寮史編纂委員会編、1928、『第四高等学校時習寮史』第四高等学校時習寮史編纂委員会。

竹内洋、1999、『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社。